

ジャクソン・ポロックの作品の「装飾性」 ——20世紀美術史への新たな位置づけ——

笥 菜奈子（京都大学）

本発表では、アメリカの画家ジャクソン・ポロック（1912-1956）の作品の「装飾性」について考察を行う。ポロックの代表作オールオーバー絵画は画面全体を覆う絵具の反復的交錯といった特徴から、発表当時、壁紙やスカーフのプリントといった装飾模様になぞらえて評価された。しかしながら、クレメント・グリーンバーグを中心とするフォーマリズムの言説はポロックの絵画を装飾と形容することを拒否し、代わりに絵画の平面性や自律性を強調した。その結果、ポロックの作品の装飾性を問う研究はこれまでなされてこなかった。しかし、ポロックが創作活動において一貫して建築物を装飾するための壁画に関心を持っていたことに鑑みれば、ポロックにおける装飾の問題は決してなおざりにされるべき問題ではないと考える。

そこで本発表では、まずポロックが1930年代という創作活動の初期より壁画の制作に携わっていたことを指摘した後、特に1950年代に計画されたカトリック教会建築計画に焦点をあてる。この計画は、ポロックの友人であった建築・彫刻家トニー・スミスが、ニューヨーク州ロングアイランドに初の私設のカトリック教会を建築するという目的のもと計画したものであった。実際にこの計画が実現することはなかったものの、E. A. カーミンはポロックがこの教会の窓に黒一色のポアリングを施す予定であったことを指摘している。しかし、この主張はロザリンド・クラウスによって二度にわたって否定され、ポロックが実際にこの計画に参加していたかは明らかにされていない。そこで発表者は、当時のポロックの書簡およびスミスの計画図案を再検討することで、ポロックがこの計画に携わっていたことを明らかにする。また、カーミンはこの計画へのポロックの参加を指摘するものの、議論はポロックの描くキリスト教的図像の解明に向かい、装飾という観点から考察を行うことはない。そこで本発表では、マティスとピカソからのポロックへの影響を考察することで、壁画以外のポロックの絵画の「装飾性」にもまた焦点をあてる。ポロックが両者から色彩や構成の面で影響を受けていることは、先行研究において指摘されてきたが、本発表では新たにピカソによる文字の表象およびマティスの装飾模様の表象がポロックに影響を与えたことを明らかにする。

また以上の考察は、フォーマリズムの美術史観とは異なる系譜にポロックを位置づけることにもなるだろう。というのも、ポロックに影響を受けながら、装飾的な絵画の制作を切望したフランク・ステラ、またさらにはこの両者に影響を受け、世界の様々な装飾模様を絵画に盛り込んだパターン・アンド・デコレーションへと至る系譜のもとに位置づけることになるからだ。たとえばステラは抽象絵画の新たな可能性を壁画や装飾に見ていたが、ポロックの作品に「装飾性」を指摘することは、そうした抽象と装飾の関係について新たな視座を与えることにも繋がるだろう。